

平成二十一年度企画展

「秩父平氏 畠山重忠とその時代」の試みについて

若松良一

はじめに

本稿は埼玉県立嵐山史跡の博物館で平成二十一年十二月五日から開催している企画展「秩父平氏 畠山重忠とその時代」の構想と準備過程、そして完成に至る全工程の記録と若干の新しい成果を展示担当者として報告し、さらに今回果たせなかったことを踏まえて、今後の課題を明らかにすることを目的として執筆するものである。執筆している現在は、開幕直後であり、入館者数は元より、各方面からの反響・批判について触れることは不可能なので、いわゆる実績報告とは異なるものであることを最初にお断りしておきたい。

一 展示構想と準備

(一) 企画展に至る経緯

畠山重忠は鎌倉武士の代表的な存在であり、埼玉県の歴史上の人物として必ず取上げられる人物である。くわえて、埼玉県立嵐山史跡の博物館がその最後の居住地といわれる国指定史跡 比企の中世城館跡群 菅谷館内に所在することから、博物館にとっては避けては通れない研究テーマであり、当然、展示においても必要不可欠なテーマである。

博物館では平成九年のリニューアルオープン、そして平成十八年度の県立博物館施設の再編成を経て、名称を歴史資料館から嵐山史跡の博物館に変更し、展示内容も比企地方を中心とする原始古代から現在に至る

考古・歴史・民俗から埼玉県の中世に特化し、考古・歴史系博物館に生まれ変わった。このため、展示室の冒頭である第一ケースを鎌倉武士のコーナーとし、畠山重忠を取上げて、その一部に重忠の活躍を示すための日本地図の大パネルを掲出し、展示資料として平沢寺所蔵の埼玉県指定文化財鑄造経筒、東京大学資料編纂所蔵の源頼朝加判平盛時奉書複製、同平某書状案複製、銅拍子復原品、重忠が力石を担ぐ絵馬の複製などを展示してきた。

また、平成十五年度には時期を限って重忠のコーナー展示を開催し、常設展示資料に加えて埼玉県立博物館（当時の呼称）が所蔵する宝寿丸写しや赤糸緘大鎧複製に加えて、資料調査過程で撮影した重忠ゆかりの地の写真をパネルに仕立てて多数展示し、オールカラー一四頁の『畠山重忠』を発行して畠山重忠の普及に現在まで大きな役割を果たしてきた。

しかしながら、館所蔵の重忠関係資料はあまりに少なく、資料収集や基本資料の複製化も進んでいないので、現在までのところ、本格的に重忠を取上げるためには外部にある資料を借用展示する企画展しか道は残されていなかった。ところが、畠山重忠は四十二歳で北条氏に謀殺され、断絶したために、いわゆる家資料がなく、他家に伝存する一次資料も寡少なため、独立して重忠をテーマとするのは難題中の難題であった。

このため、河越氏や豊島氏などを含めた秩父氏という範疇で展示構成することを検討していた昨年度後半期に、葛飾区郷土と天文の博物館より秩父平氏で共同展示を立ち上げられないかという誘いがあり、資料の相互交換、広報の共有化、普及事業の相互乗り入れなどメリットが大きいので、職員会議で諮った上で、これを受諾し、展示名称を共同企画展「坂東平氏 畠山重忠とその時代」（仮称）とすることを決定した。葛飾では「坂東平氏 葛西清重とその時代」（仮称）としたが、のちに坂東平

氏を改めて秩父平氏とした。葛飾区郷土と天文の博物館は創立以来、郷土の生んだ鎌倉武士である葛西清重を最優先の研究・展示テーマとしており、すでに企画展示とフォーラムを打っているので、一日の長があり、大いに啓発されるとともに準備過程でも数々の教示を受けることができただけは幸いであった。

ちなみに「その時代」をタイトルに付したのは、重忠と云う人物だけを対象とするのではなく、重忠を浮かび上がらせるためには時代背景を明らかにしていくという姿勢を示すとともに、重忠の直接資料でなくても、重忠の生きた時代を端的に示す資料であれば展示することができるというメリットによっている。

(二) 企画展の構想

いかにして畠山重忠の一次資料の寡少性を克服するかが最大の課題となった。その手段として最初に考えたプランは次の通りである。

- ① 重忠の前史として秩父氏嫡流を展示する必要上、秩父氏発祥の地である秩父郡内の資料調査を進めて、新規資料を開拓すること。
- ② 二次史料としての『吾妻鏡』・『平治物語』・『平家物語』・『源平盛衰記』・『源平闘諍録』などの事前調査を行って、最適な写本・版本を借用すること。
- ③ 二次史料としての系図を重視し、最適なものを選び、借用または写真展示すること。
- ④ 展示に華やかさを加えるために絵画資料として最適なものを選び資料調査と借用交渉を行うこと。

- ⑤ 重忠が奉納したとされる寺宝・社宝を資料調査し、展示に適したものについて借用交渉すること。
- ⑥ 展示素材として考古資料を重視し、従来から知られていた重忠墓

と出土骨蔵器を展示予定資料とするのは当然として、さらに重忠の生活を偲ぶために、「秩父氏の城館と寺院」の出土資料を展示候補資料とし、重忠の経済基盤としての「馬匹生産」、「鍛冶・鋳物」などの金属生産、永福寺建立の奉行人であった経緯から「瓦生産」を加えること。

- ⑦ 重忠だけでは資料が不足するので、重忠ゆかりの人物で関係資料が充実している人物を選び、展示することによって重忠の実像をさらに鮮明にするために役立てること。

(三) 資料調査と借用交渉

嵐山史跡の博物館はかつて学芸部を置いて、歴史・考古・民俗・資料保存の四室に分け、学芸員定数が一二であったが、博物館施設の再編成によって大幅な定数減となり、学芸員の定数が常勤三名、非常勤(再雇用枠)一名となったため、学芸担当一本となり、すべての学芸員が展示・調査研究・普及事業・広報などの兼務をこなしている。また、土日には常勤学芸員が一名となるため、すべての学芸業務をカバーせざるを得ない状況にある。このため、企画展専従の学芸員を置くことは不可能であり、準備期間も前年度からとすることは困難な状況にある。したがって、実質的な資料調査は当該年度にこなさなければならず、本格的には年度当初の繁忙期が過ぎた五月の連休明けから九月末までのタイトな日程となっている。

こうした時間不足をカバーするために予算要求が終わり企画展の仮題目が決定した秋口から、指定休日に予備調査を行うこととし、新年度の五月にまで及んだ。もちろん公式な折衝はできないので、重忠に関する遺跡や展示公開されている資料の下見に限られるが、前者については展示用の写真パネルの材料を相当数得ることができた。

具体的な調査地は重忠の奉納資料のある青梅御嶽神社、秩父地方の寺社などであり、約十日を割いた。

正式な資料調査は週中のノー残業デイに指定されている水曜日を軸に、週一日を割り当てたが、主催行事の準備などの関係で、予定通りにならなかったため、八月後半頃からは週二回に増やした。しかし、これには無理があつて出張中に山積する他業務を片づけるのに支障を来たし、資料調査報告をその都度、行うこともできなくなってしまった。

資料調査の起案時点では約二十日、合計四〇箇所を計画したが、途中で変更があり、最終的に調査を完了したのは次の通りである。

① 若松担当分

四月八日 横浜市区二俣川（首塚・六つ塚・吾妻鏡畠山重忠終焉の地・駕籠塚・清来寺（重忠に関する歌絵巻「夏野の露」）・鎌倉市（伝畠山重保墓塔）

四月三十日 深谷市教育委員会（共催依頼・借用折衝）・同岡部文化財整理室（岡部六弥太墓出土骨蔵器）

五月七日 埼玉県立文書館（史料の所在調査と畠山重忠に関する展示資料見学）

五月十四日 埼玉県立浦和図書館（錦絵「篠津原の戦い 畠山重忠と巴女」・平家物語）

五月二十一日 府中市郷土の森博物館（企画展「歴史の道を歩く 武蔵府中と鎌倉街道」出品資料）・大國魂神社（宝物庫展示資料）・葛飾区郷土と天文の博物館（共同展示内容打合せ）

六月四日 横浜市金沢区釜利谷（東光禅寺の伝重忠奉納馬具・重忠位牌）・金沢文庫（展示）・称名寺

六月十一日 秩父神社（秩父神社文書）・秩父市下吉田彦久保基正家

（秩父家系・阿熊村彦久保系図）・秩父市下吉田金剛院（畠山重忠位牌・秩父武綱位牌）

六月十八日 小川町上古寺小久保芳夫家（畠山重慶位牌）・東秩父村御堂浄蓮寺（開基大河原神治太郎光興坐像）・小川町上古寺土峯山の伝畠山重忠墓

六月二十五日 埼玉県立熊谷図書館（源平盛衰記）

七月二日 神川町教育委員会文化財整理室（愛染遺跡出土遺物・安保氏館跡ST五出土遺物所在調査）・阿久原牧比定地・有氏神社・丹生神社

七月九日 美里町教育委員会（水殿瓦窯跡出土資料）

七月十五日 長瀬町本野上総持寺（丹党島田氏系図・塩谷正治氏所蔵重忠錦絵）・神川町教育委員会文化財収蔵庫（愛染遺跡・安保氏館出土遺物の熟覧と写真撮影）

七月二十九日 長瀬町本野上総持寺（塩谷正治氏所蔵重忠錦絵続き）・秩父市上蒔田棕神社・丹生神社・中蒔田棕神社

七月三十一日 千葉市立郷土博物館（千葉妙見大縁起絵巻・東氏妙見菩薩立像・千葉常胤坐像・赤糸緘大鎧・平将門射的図 ※いづれも複製）

八月五日 入間市博物館（金子大系図・北条義時袖判書下・美君家忠賛並序）

八月七日 吉見町文化財センター（伝大串次郎重親骨蔵器）・吉見町大串大串次郎重親塔

八月十九日 熊谷市立図書館（重忠関係錦絵）

八月二十日 東秩父村御堂浄蓮寺（大河原神治太郎光興坐像借用折衝）
八月二十七日 熊谷市教育委員会江南文化財センター（円山遺跡出土

焼印)

八月二十八日 埼玉県立歴史と民俗の博物館(重忠墓レプリカ・後三年合戦絵巻・平家琵琶)

九月二日 飯能市吾野我野神社(妙見宮額)・智観寺(仁治三年銘加治家季供養板石塔婆)・中山氏館跡・加治神社(丹生社社殿)

九月九日 横須賀市満昌寺(三浦義明坐像)・衣笠城跡・鎌倉市由比ガ浜稲瀬川・鶴ヶ丘八幡宮・畠山重忠邸石碑・永福寺跡

九月十日 秩父神社(妙見神札)・深谷市畠山満福寺(重忠位牌・茶釜・太刀)

九月十六日 埼玉県埋蔵文化財収蔵庫(坂戸市金井遺跡出土鑄造遺物・寄居町北坂遺跡出土焼印・上里町中堀遺跡出土焼印)

※写真撮影とも

九月三十日 東京都青梅市武蔵御嶽神社(宝寿丸及び黒漆鞘)

十月十六日 川島町中山正福寺(舌長鑑調査及び搬入)・五輪塔

② 加藤担当分

八月二十八日 国立公文書館(尊卑分脉・千葉大系図・今昔物語集・平治物語・明月記・源平闘諍録・吾妻鏡・畠山しげ体)

十一月十二日 熊谷市立図書館(重忠関係錦絵)・県立熊谷図書館(源平盛衰記)

一月十三日 国立公文書館当該資料の写真撮影依頼

③ 栗岡担当分

八月四日 嵐山町教育委員会七郷文化財整理室(平沢寺出土渥美焼骨蔵器・平沢寺阿弥陀堂跡出土遺物・金平遺跡出土鑄型・山王遺跡出土かわらけ)

九月二十八日 川越市教育委員会文化財整理室(河越館跡出土遺物)

資料借立交渉

資料調査の際に、展示に適すると判断されるものについては、その場で貸出の内諾を得たものもあるが、検討を要するものは持ち帰って、最終判断を下すことにした。また、一部に交渉人を立てて折衝を行った資料がある。

なお、最終的には東光禅寺の馬具、永福寺跡出土資料、府中市郷土の森博物館所蔵資料(国司館跡出土品・武蔵国留守所文書複製など)、大國魂神社所蔵資料、神川町教育委員会所蔵資料(愛染遺跡・阿保氏館跡出土品)、慈光寺出土瓦、智観寺所蔵仁治三年銘板碑などは諸般の事情で今回の出品を見送った。

(四) 文献調査

企画展示は畠山重忠に関する歴史研究の成果に立脚するべきことは当然のこととして、重忠の生きた歴史的背景として平安時代末から鎌倉時代初期のいわゆる治承寿永の争乱についての歴史的な位置付けを把握しておく必要があった。また、重忠の先祖である秩父氏嫡流についての研究は未だ集大成が行われてはいないものの、関係論文を当たっておくことが求められた。幸い、秩父氏については河越氏、江戸氏、豊島氏、葛西氏の研究成果が纏められているので、これを参考とした。

付け加えるに、秩父氏の家中抗争として展示では欠かせない大蔵合戦に付いては保元平治の乱の前哨戦との評価もあるので、こうした研究動向も承知しておく必要があった。また、秩父氏の妙見信仰に関しては地元秩父での研究成果とともに千葉氏の妙見信仰に関する充実した研究成果を参照することが必須と考えられた。このほか、展示資料に関する個別の歴史、美術、民俗、考古の各分野における参考文献についてもすべてを列挙することは困難であるが、参考文献目録を掲げて、明らかに

しておきたい。

文献調査は前年度の秋口から約一年間にわたって、博物館図書室、県立図書館、自家蔵書を利用し、コピーを撮らず、大学ノート三冊に抜書きと論点のメモを残した。この作業はほとんど在宅作業となった。

《通史・総論》

- 一 渡辺世祐・八代國治『武蔵武士』埼玉学生誘掖會 博文社 一九一三
- 二 豊田 武『中世の武士団』豊田武著作集第六卷 吉川弘文館 一九八二
- 三 野口 実『坂東武士団の成立と發展』弘生書林 一九八二
- 四 石井 進『鎌倉武士の実像』石井進著作集第五卷 岩波書店 二〇〇五
- 五 河内祥輔『頼朝の時代 一一八〇年代内乱史』平凡社 一九九〇
- 六 安田元久『源平の争乱』新人物往来社 一九八七
- 七 福島正義『武蔵武士』さきたま出版会 一九九〇
- 八 岡田清一『北条得宗家の興亡』新人物往来社 二〇〇一
- 九 奥富敬之『鎌倉北条氏の興亡』吉川弘文館 二〇〇三
- 一〇 永井 晋『鎌倉幕府の転換点「吾妻鏡」を読みなおす』NHKブックス 二〇〇〇
- 一一 元木泰雄『保元・平治の乱を読みなおす』NHKブックス 二〇〇四
- 一二 岡田清一『鎌倉幕府と東国』続群書類従完成会 二〇〇六
- 一三 五味文彦『武士と文士の中世史』東京大学出版会 一九九二
- 一四 五味文彦『日本史の中世を歩く―遺跡を訪ね、史料を読む―』岩波新書 二〇〇九

《秩父氏関係》

- 一五 青葉伊左吉『吉田城趾』おたまじゃくしの会 一九五六
- 一六 赤城宗徳『平将門』角川選書三二 角川書店 一九七〇

- 一七 峰岸純夫『鎌倉悪源太と大蔵合戦』『三浦古文化』四三号 一九八八
- 一八 木村重光『大蔵合戦と秩父一族・源平内乱期武蔵国の政治情勢―』『河越氏の研究』名著出版 二〇〇三

- 一九 野口 實『中世成立期における武蔵国の武士について―秩父平氏を中心に―』『河越氏の研究』名著出版 二〇〇三

- 二〇 長塚 孝『秩父平氏二題』『河越氏の研究』名著出版 二〇〇三

- 二一 岡田清一『武蔵国留守所惣検校職に就いて―北条執権政治体制成立史の一齣―』『河越氏の研究』名著出版 二〇〇三

- 二二 岡田清一『河越氏研究の成果と課題』『河越氏の研究』名著出版 二〇〇三

- 二三 落合義明『武蔵国河越荘について』『河越氏の研究』名著出版 二〇〇三

- 二四 落合義明『武蔵国河越館について』『河越氏の研究』名著出版 二〇〇三

- 二五 杉山 博編『豊嶋氏の研究』関東武士研究叢書語5 名著出版 一九七五

- 二六 萩原龍夫編『江戸氏の研究』関東武士研究叢書語1 名著出版 一九七七

- 二七 葛飾区郷土と天文の博物館『葛西氏とその時代』畚書房 一九九七
- 二八 谷口 榮『源頼朝と葛西氏』開館一〇周年記念特別展図録 葛飾区郷土と天文の博物館 二〇〇一

- 二九 谷口 榮『鎌倉御家人葛西清重の軌跡』『物質文化史学論聚』加藤晋平先生喜寿記念論文集 二〇〇九

《美術史関係》

- 三〇 小松茂美編『後三年合戦絵詞』日本の絵巻一四 中央公論社 一九八八

三二 小松茂美編『男衾三郎絵詞・伊勢新名所絵歌合』続日本の絵巻一二 中央公論社 一九九二

三三 松原 茂・池田 宏「伝世の品々」『皇室の名宝―美と伝統の精華―』御即位一〇年記念特別展図録 東京国立博物館・宮内庁・NHK 一九九九

《畠山重忠関係》

三三 貫 達人『畠山重忠』人物叢書 吉川弘文館 一九六二

三四 林 宏一「畠山満福寺の仏像」『武蔵野』第五四卷第二号 武蔵野文化協会 一九七六

三五 清水 寿『鑄師・鍛冶師の統領と思われる畠山重忠について』一九九四

三六 御嶽神社『御嶽神社の祭り』百水社 二〇〇三

三七 村松 篤『畠山重忠辞典』川本町教育委員会 二〇〇四

三八 八幡義信「畠山重忠と北条氏」『武蔵野』第八一卷第二号 特集 畠山重忠と鎌倉武士―畠山重忠没後八〇〇年―武蔵野文化協会 二〇〇五

三九 赤羽洋輔「元久二年、畠山重忠の乱」についての一考察―北条時政失脚の原因をめぐる―『武蔵野』第四十七卷第二・三号 一九六八（『武蔵野』第八一卷第二号に加筆再録）

四〇 岡田清一「重忠没後の武蔵国留守所について」『武蔵野』第八一卷第二号 武蔵野文化協会 二〇〇五

四一 彦吉三枝子「足利氏と畠山氏―岩松畠山氏の成立―」『武蔵野』第八一卷第二号 武蔵野文化協会 二〇〇五

四二 加藤 功「足立遠元と畠山重忠」『武蔵野』第八一卷第二号 二〇〇五

四三 渡 政和「畠山重忠の滅亡と秩父平氏一族の動向」『武蔵野』第八一卷第二号 武蔵野文化協会 二〇〇五

四四 芦田正次郎「源平鬪諍録にみる畠山重忠―武蔵国豊島郡滝野川で頼朝に参陣―」『武蔵野』第八一卷第二号 二〇〇五

四五 村松 篤「武蔵武士畠山重忠ゆかりの地」『武蔵野』第八一卷第二号 武蔵野文化協会 二〇〇五

四六 御嶽神社『御嶽神社宝物集』武蔵御嶽神社

《武蔵七党関係》

四七 小野文雄・福島正義「秩父神社文書」『埼玉県文化財報告書』第一集

四八 川又辰次編『軍記 武蔵七党』一九八五 埼玉県教育委員会 一九七六

四九 井上 要「補訂版 秩父丹党考」埼玉新聞社 一九九三

五〇 大多和晃紀ほか『新金子十郎家忠物語』同刊行会 一九九三

五一 海津一朗「東国における郡鎮守と郡内在地領主群―鎌倉末期秩父地方の郷々地頭一揆状況―」『河越氏の研究』名著出版 二〇〇三

五二 菊池紳一「金子文書の柏木郷について」別冊『歴史読本』地名を歩く 新人物往来社 二〇〇九

《妙見信仰関係》

五三 埼玉県神社庁神社調査団「秩父神社」『埼玉の神社』入間・北埼玉・秩父 埼玉神社庁

五四 丸井敬司「千葉氏の武士団形成に関する一考察」『研究紀要』第一号 千葉市立郷土博物館 一九九五

五五 丸井敬司・宮原さつき『千葉妙見大縁起絵巻』千葉市立郷土博物館 一九九五

五六 井上勝海「奥武蔵妙見考―我野神社・北川神社と秩父妙見―」『あしなか』第二四九輯 妙見信仰特集 山村民俗の会 一九九六

五七 沖本 博「妙見信仰序説―千葉妙見とその源流―」『あしなか』第二四

九輯 妙見信仰特集 山村民俗の会 一九九六

五八 千嶋 壽「妙見の七つ井戸」秩父神社報『柞の杜』第一六号 秩父神社
一九九七

五九 丸井敬司・二本松文雄『相馬地方の妙見信仰―千葉氏から相馬氏へ―』

図録 野馬追の里原田市立博物館・千葉市立郷土博物館 二〇〇三

〇〇三

六〇 丸井敬司『妙見信仰と羽衣伝承』平成一九年度特別展図録 千葉市立郷土博物館 二〇〇七

郷土博物館 二〇〇七

六一 甲田豊治「夜祭の神 妙見さまのお姿」秩父神社報『柞の杜』第三八号

秩父神社 二〇〇八

《牧・馬具》

六二 小松大秀編『日本馬具大鑑』第三卷 中世 日本中央競馬会 一九九〇

六三 町田有弘「牧別当に関する一考察」『河越氏の研究』名著出版 二〇〇三

三

六四 田中広明「古代の地域開発と牛馬の管理」『牧と考古学―馬をめぐる諸問題―』研究集会資料集 山梨県考古学会 二〇〇五

《考古学関係》

六五 小泉 功・峰岸純夫「河越館址の調査と保存の経過について」一九七二

(『鎌倉幕府と東国』に再録)

六六 柳田敏司・小野義信『菅谷館跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第六集 埼玉

県教育委員会 一九七七

六七 金子真土・浅野春樹ほか『畠山重忠墓』川本町教育委員会 一九八四

六八 千々和實『板碑源流考』一九八七

六九 丸山陽一『国指定史跡 水殿瓦窯試掘調査報告』埼玉県美里町教育委員会 一九九〇

七〇 中藤榮祥『常寂山智観寺誌』一九九六

七一 村松 篤『畠山館跡』五次調査の報告 川本町教育委員会 一九九九

七二 鈴木邦照・岡田賢治ほか『河越氏と河越館』第一六回企画展図録川越市立博物館 二〇〇〇

立博物館 二〇〇〇

七三 鎌倉考古学研究所『浄土庭園と寺院』永福寺創建八〇〇年記念シンポジウム記録集 一九九七

ジウム記録集 一九九七

七四 福田 誠ほか『永福寺跡』鎌倉市教育委員会 二〇〇二

七五 赤熊浩一『金井遺跡B地区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第二四八集 二〇〇〇

告書第二四八集 二〇〇〇

七六 赤熊浩一「武蔵国における古代から中世の製鉄・鑄造遺跡―金井遺跡の梵鐘鑄物師を探る―」『武蔵野』第八二巻第二号 特集 古代

中世の武蔵野の鉄生産 武蔵野文化協会 二〇〇六

七七 深澤靖幸「武蔵惣社六所宮の中世永福寺式瓦」『府中市郷土の森博物館紀要』第二〇号 二〇〇七

紀要』第二〇号 二〇〇七

七八 水口由紀子「誕生 武蔵武士」特別展図録 埼玉県立歴史と民俗の博物館 二〇〇九

物館 二〇〇九

七九 深澤靖幸「歴史の道を歩く 武蔵府中と鎌倉街道」ブックレット一二 府中市郷土の森博物館 二〇〇九

府中市郷土の森博物館 二〇〇九

八〇 若松良一「堂地遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第二二六集 二〇〇〇

二二六集 二〇〇〇

《基本資料》

保元・平治物語『日本古典文学大系』三一 岩波書店 一九六一

平家物語『日本古典文学大系』三二 岩波書店一九五九・一九六〇

吾妻鏡『全譯吾妻鏡』新人物往来社 一九七六

源平闘諍録『源平闘諍録―坂東で生れた平家物語―』講談社学術文庫 一九

※なお、市町村史と考古学発掘調査報告書の一部については紙幅の関係で割愛させて頂いた。

二 展示構成の決定

(一) 検討会及びシンポジウム指導者による助言

企画展は四月段階で基本構想を定めて資料調査を開始し、資料の大部分が決定した九月段階で基本計画に昇格させ、さらに借用交渉が終わった十月段階で開催要項を定めた。こうした過程で、職員（学芸員四名・管理職二名・総務職員一名）全員によって九月から検討会が四回持たれた。また、シンポジウム指導者会議の席上で、企画展の進捗状況を報告し、資料の選択と解説パネルの原稿について指導・助言を仰いだ。その結果、決定された事項を箇条書きで記す。

① 歴史資料及び美術資料と発掘調査資料を同一ケース内に展示しないこと。これは考古資料が泥物であり、種類の異なる資料を汚染する可能性があるという事実によるだけでなく、一般的な作法ともなっていることによる。当館の場合、ウォールケースのため、考古展示は完全に切り分けることを意味している。実際は考古資料の説明資料として歴史資料を添える必要があるが、その場合は写真パネルを置くこととした。

② 歴史展示は同時代資料かその写本・模本を用いること。当初、II章 畠山重忠の生涯の展示箇所、歴史資料に混じて錦絵を置き、重忠の宇治川や一ノ谷の合戦での活躍をビジュアルに伝えるという原案であったが、この方針によって、錦絵コーナーを設けて、覗きケース三台を充てることとした。

③ 借用候補資料が超過し、飾りきれない可能性があるため、精選し、精密なレイアウト図を作成すること。担当学芸員には必ずといっていいほど、賑やかに沢山の資料を飾ろうとする傾向があるので、借り過ぎが起ることが多い。レイアウト図を作成した結果、一〇〇件の資料を八五件に減じることに決定した。このため、赤糸織大鏡複製の展示は取り止め、プロローグの重忠像原型複製二点とミニチュア、エピローグの平家物語語り本と琵琶の展示も割愛することとなった。

④ 「重忠伝説の発生とひろがり」は当初案では第二章「重忠の生涯」に続く一つの章としていたが、歴史展示とは異なるものであることから、コラムとして切り放し、ウォールケースではなく独立した免震ケースを充てることとした。

⑤ 展示資料については、当初は重忠没年までの資料に限るべきとの意見があったが、そこまで限定してしまうと「重忠ゆかりの人々」の中で鎌倉時代末期の秩父神社文書や御物太刀が対象外となり、「武蔵武士の生産遺跡」においても十三世紀中葉以降の金井遺跡や永福寺第二期瓦しか出土していない水殿遺跡を扱うことが困難となり、展示そのものが縮小してしまうため、鎌倉時代いっぱいまでの幅を持たせ、重忠とほぼ同時代に活躍した武蔵武士の動向を扱うこととした。

⑥ 畠山重忠墓と岡部六弥太墓については五輪塔自体が鎌倉時代後期から南北朝時代に属すると推定されるという研究情勢から、展示の可否が議論されたが、伝大串次郎重親墓の骨蔵器が石塔の時代をはるかに遡り、重親にふさわしいという事実を鑑みて、鎌倉時代前半期までの墓については当初は石塔を伴わず、数十年の後に石塔が加

えられた可能性を提示した上で重忠墓と六弥太墓を扱うことにした。ただし、重忠墓では骨蔵器が失われていること、六弥太墓では年代の降るものしか出土していない現状をきちんと伝えることとした。

⑦ 嵐山町金平遺跡出土の弘安四年銘鑄型については平沢寺への供給が推定されているが、重忠の没後なので、その経営者が秩父氏であるのか否かが不明なため今回は展示候補としないことを決めた。また、神川町愛染遺跡については鍛冶関係の遺物が十世紀後半から十一世紀にわたる土器を伴って出土しているが、遺構が住居址であり、鍛冶遺構が不明瞭なため、今回は見送り、今後の検証を課題とした。

⑧ シンポジウム指導者の菊池紳一氏からは畠山庄司の呼称から重能が畠山庄の農業経営者とした旨の解説パネル原案について、庄官が官職である可能性をご教示頂き、訂正を加えた。

(二) 展示構成の決定

前記した職員による企画展検討会議を経て、原案が整理、修正され、最終的には次の通りに決定した。

I 秩父平氏の登場

1 秩父氏の出自と経歴

ねらい 秩父氏が桓武天皇の子孫である平良文の末裔であり、玄祖父秩父武綱が後三年合戦で源義家に従い、先陣の大將軍を勤めた家柄であることを示す。

主な展示資料 尊卑分脈・桓武平氏諸流系図写真・今昔物語集・後三年合戦絵巻模本・源平闘諍録

2 秩父氏の妙見信仰と将門崇拜

ねらい 秩父平氏が一族の守護神として千葉氏と共通する妙見菩薩を信仰し、さらに平将門を崇拜していたことを示す。

主な展示資料 秩父神社妙見神札版木・千葉妙見大縁起絵巻複製・城峯神社写真

3 大蔵合戦

ねらい 平沢寺出土の経筒によって十二世紀中頃には秩父重綱が嵐山町付近に移住したことを示し、その頃、二男重隆に家督を譲って大蔵館に住ませたが、養子に迎えた源義賢が源義朝と覇を競おうとしたため、その子義平と家督奪還を目指す重綱の嫡孫畠山重能が手を結んで、重隆と義賢を急襲して殺すという大蔵合戦が勃発したが、秩父家の内部分裂がその一因であったことを示す。

主な展示資料 鑄銅経筒・平治物語

II 畠山重忠の生涯

1 重忠の初陣と源平合戦の軍功

ねらい 重忠は父が平家に属していたため、治承四年の頼朝蜂起の際に、十七歳で初陣して小坪で敗戦を喫し、雪辱戦で三浦氏の立て籠もる衣笠城を攻めて、外祖父の義明を討ったこと、頼朝軍の鎌倉入りに先陣を承ったこと、そして源平合戦では宇治川合戦の先陣を勤め、一の谷でも鴨越えの伝説を残したことを示す。

主な展示資料 吾妻鏡・平家物語・源平盛衰記・三浦義明坐像写真

2 人間重忠とその苦悩

ねらい 文治五年の奥州合戦で先陣の大將を命じられながら、葛西清重らに抜駆けをされたこと、文治三年に所領沼田御厨で代官が起こした乱妨のために囚人となり、自殺を図ろうとした後に、武蔵の館に引籠もつ

たことなどから人間としての重忠の苦悩を示し、文治二年に静御前が舞を舞った際に、銅拍子を打ったことにも重忠の人間性と芸術性が窺えることを示す。

主な展示資料 吾妻鏡・源頼朝加判平盛時奉書複製・太刀宝寿丸・赤糸織大鎧写真・銅拍子復原品

3 重忠の最期

ねらい 頼朝の死後、北条氏の専横振りが著しくなると、重忠待望論が生れるとともに、北条氏に警戒され、牧の方の讒言により、ついに元久二年六月二十二日に誅殺されてしまったが、この事件は北条義時が武蔵国を入手し、さらに父を追放して執権に付くためのクーデターであったことを示す。

主な展示資料 明月記・吾妻鏡・島津家文書平某書状案・男衾三郎絵

詞

重忠錦絵コーナー

ねらい 同時代資料ではないが、重忠の活躍をビジュアルに再現する素材として錦絵を別置き、観覧者の目を楽ませる。

主な展示資料 宇治川大合戦圖・粟津原合戦畠山重忠勇婦巴女・鎌倉大評定・和漢準源氏桐つぼ秩父庄司重忠一の谷鴨越勇猛・観音靈驗記秩父巡礼・芳年武者无類畠山重忠

コラム 重忠伝説の発生とひろがり

ねらい 畠山重忠の墓と伝わる場所が県内に複数あり、位牌を祭祀する寺も埼玉県内には多い。このことは重忠の一族や重忠を慕う多くの領民が重忠の冥福を祈ったことの反映であり、同時に数々の伝説が生れたことを示す。また、重忠の末子重慶と重忠の子孫と伝わる彦久保家についても触れる。

主な展示資料 満福寺重忠位牌・金剛院重忠位牌・小久保家重慶位牌・吾妻鏡・秩父家系・小川町士峯山重忠墓写真・飯能市第六天重忠墓写真

III 重忠ゆかりの人々／重忠の人脈形成

秩父氏は坂東平氏の三浦氏や千葉氏などの大規模武士団と婚姻関係を結ぶとともに、武蔵七党に属する丹党・児玉党とは軍事的な主従関係を有し、その他の中小武士団のうちで有力な者とも個別的な婚姻関係を結ぶことによって勢力の増大を図っていた。このような重忠と密接な関係の有した人物のうち、資料に恵まれ、とくに画像や立体像を残した人物を中心に選定した。

なお、重忠の股肱の臣である本田近常、榛沢成清そして義兄であった足立遠元については資料不足のため、展示ができなかった。

1 千葉常胤

ねらい 鎌倉幕府創業の大功労者で元老として力を振るった常胤は重忠の大伯父であり、秩父氏と近い坂東八平氏の代表的な氏族であること、秩父氏と共通する妙見信仰を持っていたことを示し、沼田御厨事件の際にも千葉胤正に預けられ、自殺を図ったために頼朝に許しを求めてくれたことにも触れる。

主な展示資料 千葉常胤坐像複製・千葉大系図・吾妻鏡・東氏妙見菩薩立像複製

2 葛西清重

ねらい 秩父氏諸流出身の葛西清重は頼朝蜂起の際に、いち早く頼朝に付き、重忠とは異なる対応を取ったこと、奥州合戦で重忠を抜駆けして、先陣の手柄をたてたため、奥州に広い所領を与えられ、奥州奉行に任じられたこと、元久二年の二俣川の闘いでは重忠征討軍の先陣を勤め

ことなど、重忠の対極にある経歴を示す。

展示資料 葛西清重坐像複製・葛西清重夫妻画像模本・桓武平氏諸流系図写真

3 丹党の人々

ねらい 秩父を本拠として児玉郡や入間郡にも広がった武蔵七党中の大勢力丹党諸氏は秩父氏の支持母体であり、治承・寿永の合戦では重忠の直属軍であったことを示すとともに、重忠没後、秩父妙見宮の維持や祭祀を継承したこと、東秩父出身で播磨の地頭となって西遷した大河原氏が秩父神社に神宝太刀を奉納したことを示し、秩父郡の丹党野上氏が重忠を開基として総持寺を建立したことなどにも触れる。

展示資料 平家物語・秩父神社文書・御物太刀写し・大河原神治太郎光興坐像・丹党島田氏系図

4 金子家忠

ねらい 重忠の姉妹を妻とした村山党の有力武士金子家忠は義兄であり、衣笠城攻めでは重忠に属し、獅子奮迅の大活躍をしたが、元久二年には重忠征討軍に加わったことを示す。

展示資料 金子大系図・美君家忠賛並序・源平盛衰記・北条義時袖判書下

5 岡部忠澄

ねらい 重忠の姉妹を妻とした猪俣党の有力武士岡部忠澄は一ノ谷の合戦で平家の大將平忠度を討取るという軍功で知られ、奥州合戦に従軍し、二度の上洛に隋兵を勤めたことを示す。

展示資料 武蔵七党系図・平家物語・岡部忠澄夫妻坐像

IV 秩父平氏の居館と寺院

ねらい 発掘調査資料と写真パネルによって秩父平氏の居館のうち、秩父氏館跡、畠山館跡、大蔵館跡、菅谷館跡、河越館跡、堂地遺跡、平沢寺、同阿弥陀堂跡を取上げ、秩父氏の暮らし振り信仰のあり方を示す。

主な展示資料 山王遺跡出土かわらけ・平沢寺阿弥陀堂跡出土土器、大蔵館跡出土土器と陶磁器・行司免遺跡土壇墓出土和鏡と鋏・河越館跡出土木製品と土器陶磁器・堂地遺跡出土武器武具類

V 武蔵武士の生産遺跡

武士の生業は武芸をもって官仕し所領の経営を行うほかに、秩父氏の場合、馬匹生産、金属の生産加工、瓦生産に深く関与したことが知られている。

1 馬匹生産

ねらい 秩父氏は別当を名乗り秩父牧の責任者として丹党諸氏とともにその経営に当たり、産出馬を都に貢納するとともに、騎馬軍団の備えとし、さらに余剰の売却益があったことを示す。また、武蔵が鎧の名産地であったことにも触れる。

展示資料 「有」字焼印・「中」字焼印・「令」字「石」字焼印・舌長鎧

2 鍛冶・鋳造

ねらい 秩父氏関係の遺跡が未確認のため、十三世紀中葉から十四世紀の大規模な鋳造遺跡である坂戸市金井遺跡を取上げ、児玉党浅羽氏が仏像仏具だけでなく、農耕具も生産していたことを示す。

展示資料 各種鋳型・三叉状土製品・鋳造用工具・鉄滓・銅滓・ふいご羽口・滑石製軍配紋スタンプ

3 瓦生産

重忠が幕府の祈願寺である永福寺の奉行人に任命されており、美里町の水殿瓦窯跡から瓦が供給されている事実を踏まえ、重忠の求めによって在地領主の児玉党の武士が経営を行ったことを示す。

展示資料 水殿瓦窯跡出土瓦・水殿瓦窯跡写真

VI 英雄たちのとむらい

1 大串重親墓と骨蔵器

吉見町大串には重忠の烏帽子子である大串重親の墓と伝えられる宝篋印塔があり、発掘調査によって出土した骨蔵器の年代や品質から重親の墓である可能性が高いことを示す。

展示資料 伝大串重親墓出土白磁四耳壺と外容器の渥美焼大甕・宝篋

印塔写真

2 畠山重忠墓と骨蔵器

深谷市畠山にある畠山重忠墓の発掘調査成果を紹介し、重忠の五輪塔下の骨蔵器が抜き取られていたことと、隣接する3号墓の骨蔵器が十三世紀後半から十四世紀前半に属する在地産の粗末なものであったことを示す。また、畠山館跡内から十三世紀前半代の火葬施設が検出されていることにも触れる。

展示資料 畠山重忠墓五輪塔レプリカ・第三号墓出土骨蔵器・火葬施設

設出土かわらけ

3 岡部忠澄墓と骨蔵器

深谷市普濟寺にある岡部忠澄墓を紹介し、大正時代に改葬されて、骨蔵器の位置が移動してしまっていることと骨蔵器の時期がいずれも十三世紀後半以降のものであり、忠澄の骨蔵器としてふさわしいものが未発

見であることを示す。

展示資料 岡部六弥太墓五輪塔レプリカ・骨蔵器常滑焼壺

三 企画展の成果と今後の課題

今回の企画展では、準備に入る前から重忠の直接資料が極めて乏しく、工夫を要する困難な企画であることを周囲から耳に入れられていた。しかし、畠山重忠の本格的な企画展示は重忠の館と伝えられる地に建つ当館にとって、なさねばならぬ根本事業であり、これを契機として常設展示の改良や研究課題の設定が可能となるという期待は大きかった。

幸い、重忠にはその事績や人間像を詳細に語る『吾妻鏡』や『平家物語』などの二次資料がふんだんにあった。また、重忠伝説も豊富である。しかし、これらの文献資料をすべて提示するだけでは展示が平坦となり、魅力的な構成とはならない。このため、重忠の前史となる第I章では秩父氏の妙見信仰を取上げ、関連資料の調査を行った結果、千葉氏との信仰の共通性を発見することができた。また、重忠を浮かび上がらせるためには重忠ゆかりの人々を取上げて、彼らの人間像を示し、さらに重忠の人脈形成の意味を探ろうとした。この第III章の取組みは、坐像や画像を揃えることによって一つの山場を形成し、功を奏することができたのではないかと思う。とくに大河原神治太郎光興像と岡部忠澄夫妻像は初出品であり、ご理解を頂いた所蔵寺院に深く感謝の意を表するものである。同様に信仰の対象であり、門外不出の位牌の展示を御許し下さった寺院や妙見神札を初出品下さった秩父神社に対しても心よりの御礼を申し上げたい。いずれも魂の籠もった存在感ある展示物であり、観覧者の胸を打つものがあるとう期待している。

刀剣資料についても御物太刀と宝寿丸の写しを展示させて頂いたが、

後期には実物の宝寿丸の出品が決定している。御物太刀に関しては銘文の歴史性の高さ、宝寿丸については重忠の奉納刀という来歴の貴重性が際立っている。このたび、刀剣の指導者として金子・宇佐美の両先生を御迎えし、本格的な取扱いが可能となったことも当館にとって幸せなことである。

考古資料については秩父氏の居館のうち、河越館の資料の豊富さが浮彫りとなったが、大蔵館跡から近年出土し始めた十三世紀代の遺物は今後の調査の進展が期待できるものである。また、平沢寺は秩父重綱が経筒を奉納し、吾妻鏡に院主職の補任が鎌倉幕府から行われていることから、秩父氏の氏寺と目される寺院であり、東国最大級の阿弥陀堂跡も検出されているので、秩父氏の信仰の拠点が今後の調査研究で明らかにされることが期待される。

「鎌倉武士の生産遺跡」で取上げた馬匹生産では、残念ながら古代の焼印が展示主体となつてしまい、あらためて中世の秩父牧の解明が課題であることを実感した。鍛冶・鋳物では県内の中世に属する調査例が蓄積されてきているので、今後、その企画展を打つことも十分可能となろう。

「英雄たちのとむらい」では石塔が埋葬から相当後に立てられる事実のあることを示し、鎌倉時代前半期までの特徴と推定したが、この仮説が正しいかどうかは今後の研究課題となる。

最後に、畠山重忠は歴史資料、伝説資料、考古資料の三位一体で研究を進めることが必要であることを確認しておきたい。その方法や目的にも多様性が想定されるが、重忠だけを取上げるのではなく、秩父氏という枠で研究を進めることが肝要であり、その場合、考古学においては大蔵館より遡る秩父氏の居館跡と生産遺跡の調査解明が待たれる。また、菅谷館については現存する姿は戦国期に拡張整備されたものであり、重

忠の時期の館跡がどこに重複しているのか、あるいはそうではないのかを発掘調査によって検証するしか術がないので、早期に史跡整備を前提とした調査計画に着手することが不可欠である。

千葉氏と共通することが明らかとなった妙見信仰と将門崇拜については、秩父郡とその周辺に分布する妙見を祀る神社と秩父氏や重忠を開基とする寺院の徹底的な調査が必要であり、悉皆調査を行えば、予想以上の成果があるのではないかと思われるので、具体的な取組みを始めたい。重忠伝説については村松篤氏の全国的な研究成果があり、今後、もっとも進展の期待される分野である。これまた、伝説の採集調査と構造的な分析研究が求められるものである。この分野では大和絵本や物語本の研究も新たな素材として研究を進めていく必要がある。

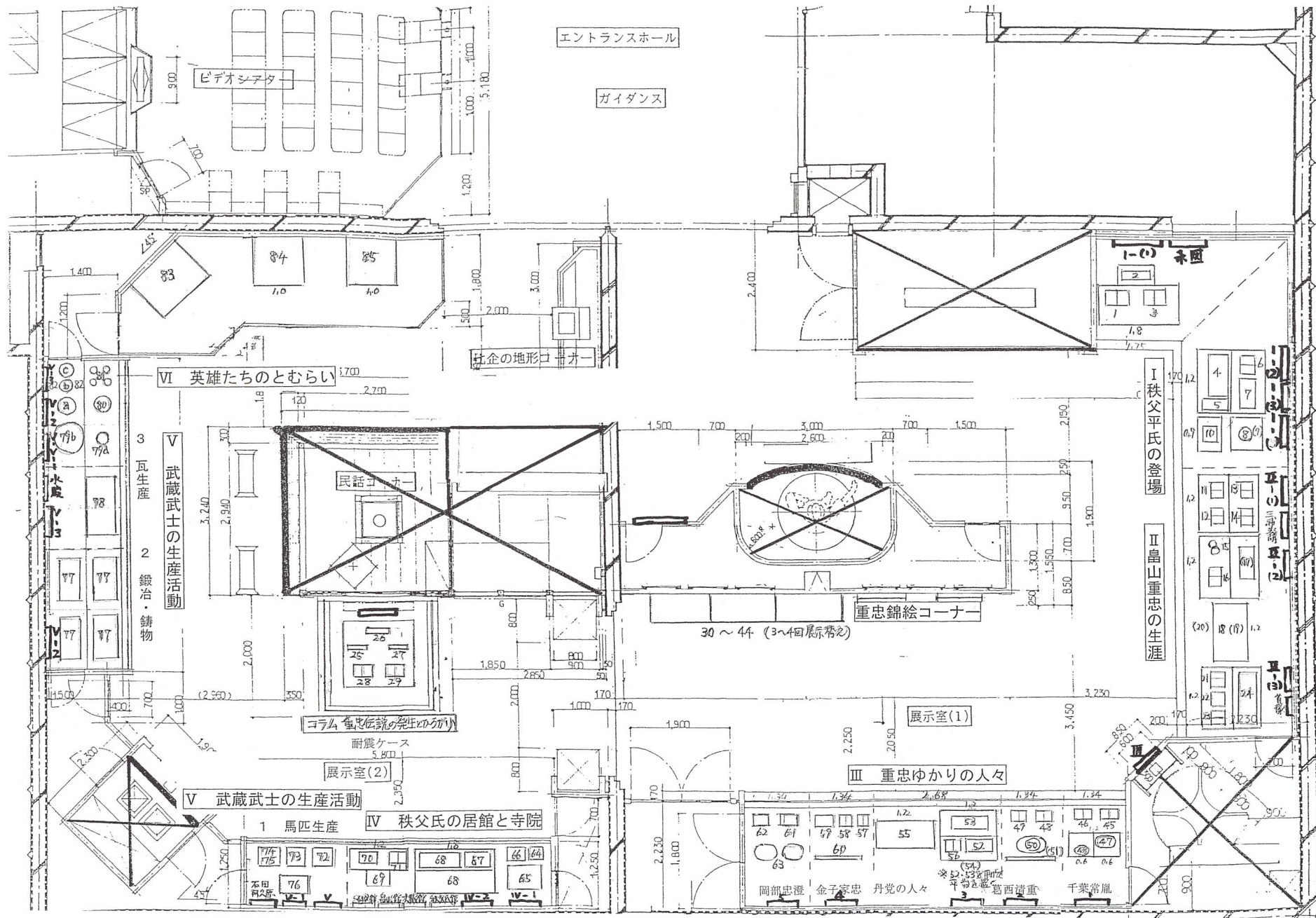
これらの課題を担当学芸員の興味対象とするのではなく、衆議によって博物館の具体的な研究課題として設定することが求められるのであり、さらに地域の歴史、考古、信仰、伝説研究者と共有することができれば、研究は大幅に進展することが可能となるであろう。

まとめ

今回の企画展は当館が先学の研究論文や発掘調査の成果をもとに、短期間の準備で行った畠山重忠研究の具体化の一例であり、展示資料において不十分な点や研究成果の吸収不足もあろうかと思う。

今後も、畠山重忠と秩父平氏の研究を当館の主たる研究課題に掲げ、職員が協力・努力し、その成果を逐次講座や論文として公表し、一歩進んだ企画展示を打つ機会が得られるよう祈念して筆を置くことにしたい。

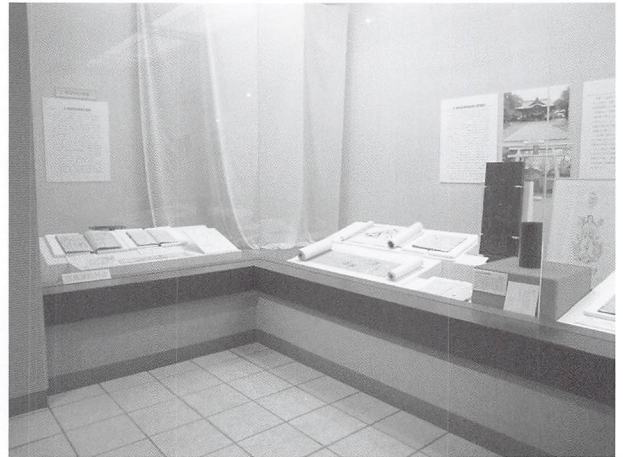
最後になりましたが、貴重な資料を御貸与下さった全ての資料所蔵者様、有益な御助言を頂いた諸先生方に、心より御礼申し上げます。



第1図 展示レイアウト



1 展示室入り口の重忠ロボット



2 第1章「秩父平氏の登場」



3 第2章「畠山重忠の生涯」



4 重忠錦絵コーナー



5 コラム「重忠伝説の発生とひろがり」



6 第3章「重忠ゆかりの人々」前半

写真1 展示施工(1)



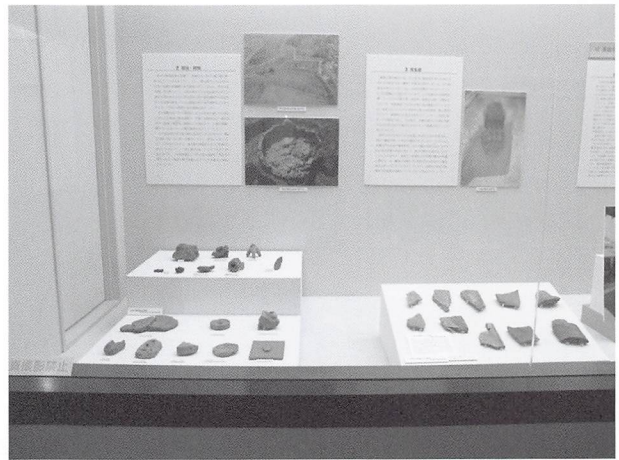
7 第3章「重忠ゆかりの人々」後半



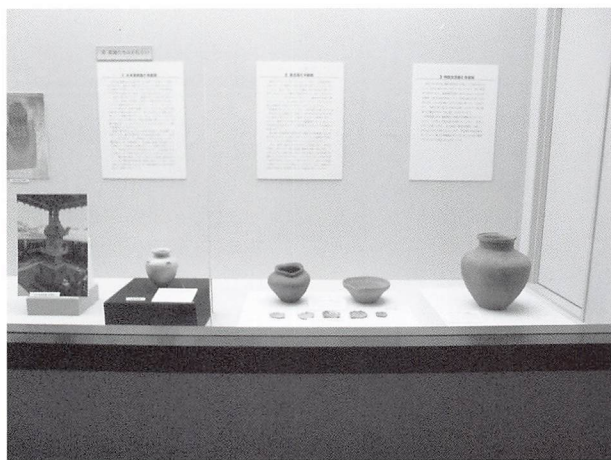
8 第4章「秩父平氏の居館と寺院」



9 第5章「武蔵武士の生産遺跡」
第1節（馬匹生産）



10 第5章「武蔵武士の生産遺跡」
第2・3節（鍛冶鑄物・瓦生産）



11 第6章「英雄たちのとむらい」（骨蔵器）



12 第6章「英雄たちのとむらい」（石塔）

写真2 展示施工(2)